病院図書室　13(4):144-145, 1993

MEDICAL ESSAY 3

生まれて初めて

徳永　進

生きていて面白いのは、今まで知らなかったことに出会うからだろう。生まれて初めて雪をみて喜ぶ。生まれて初めて玉子焼きを食べておいしかった。生まれて初めて自転車に乗れた。生まれて初めて恋をした。初めてはいい。

でも、いいことばかりに出会うわけにはいかない。生まれて初めて怒鳴られた。生まれて初めて事故にあった。生まれて初めて失恋した。生まれて初めて不正義をした。生まれて初めて手術を受けた。生まれて初めて老いを覚え、生まれて初めて死に直面する。

老いや死に初めて出会って、それを面白いと感じることができる人はすばらしいと思う。普通は、辛いことに出会うと、生まれてこなければよかったと思ったり、生きていくことが面白くなくなってくる。

＊　＊　＊

今年（1993年）の9月、知人に誘われて所沢の西武球場に行くことになった。最初は、講演会も終って御飯でも食べましょうか、という予定だった。プロ野球を見に行くなんて、全く頭になかった。彼はごあいさつ程度に「この近くに西武ライオンズのホームグランドの西武球場がありましてね。私は時々八王子から車を飛ばすこともあるんです。今日はパリーグの天王山と言われている西武対日本ハムですよ」と言ったのだった。

仕事を終えた所だったし、その夜は追われる仕事もなかったので、「行きましょう」とぼくは答え、二人は浦和界わいの複雑な路線を乗り継いで、南浦和で降りてタクシーに乗った。ひどい渋滞に巻き込まれた。タクシーのラジオが実況中継を開始した。試合は進んで行く。タクシーは進まない。3回が終わる時、諦めかけていた球場にようやく着いた。

＊　＊　＊

着くと、明るい照明があたりを照らしている。なんだか心がワクワクしてくる。切符を買って日本ハムの内野席に座った。両チームの楽団も演奏をやっている。楽団は日本ハムの方がうまい。とにかく、生まれて初めてプロ野球を見るのだ。ジャジャジャジャジャン。

「カキーン」、4番清原がライトへホームランを打った。生まれて初めてプロ野球のホームランを見た。知人は早速にビールを注文した。大きな紙コップに移した350mlの缶ビールが一杯500円。ゴクゴクと飲んだ。旨い。涼しい風が吹いている。「カーン」、三塁ゴロ、日本ハム片岡がきれいにさばいて一塁へホースアウト。「カーン」、とセンターフライという場面もあった。日本ハム鈴木が球と同じ時に落下点に移動して、ナイスキャッチだった。本物の玉に、本物の選手に、本物の飛球。どれも初めてだ。「カーン」と秋山が、また「カーン」と石毛がホームランを打った。知人はその度に立ち上がり、「やったあー、やったあー」と大声をあげた。日本ハム席にいるのに、である。試合は結局、4対3で西武が勝った。柴田や工藤のピッチングも迫力があった。

生まれて初めてプロ野球を見て、感じたことがいくつかあった。球場は広い、明るい、ということ。楽団の演奏が場を盛り上げているということ。

とくなが　すすむ：鳥取赤十字病院内科部長

風が吹いて気持ち良いし、雨も降って濡れるということ。ピッチャーが一番よく働いているし汗をかいている、外野選手なんか、時には無労働のこともあるということ。なんと言ってもホームランがきれいだ。ホームランは点数を稼ぐ強力な武器としか思ってなかったが、ホームランが賞賛されるのは、あの美しい弧を描くその芸術性にあるということ、それらのことを知った。

癌の末期に「プロ野球を西武球場（ドームはいけない。あそこには風が吹かない。夜空が見えない）で観戦する」というプログラム、考えてもいいなあ、ほんとにそう思った。

＊　＊　＊

今年の夏はさんざんだった。さんさんと陽が照ることなどなかった。

7月中旬に夏休みをとった同僚も「雨の休日」だったし、7月下旬の同僚も、同じく「雨の休日」だった。わずかに陽が射す7月下旬の土曜日、妻と中学1年の娘と3人で日本海に泳ぎに行った。思ったより波があり、冷たかった。岩場で泳いでいて、波打ち際の方へあがろうと歩いていると、後ろから波がきて、押されて足場がぐらつき、力を込めて足をついた瞬間、「イタタ」と感じた。ちょっと切ったかなと思った。

上陸して砂利と石の浜に腰をおろして、足の裏を見て驚いた。カパッと4㎝くらいが開いている。血がポトポトと落ちている。思わず手で圧迫した。女房がシャツをちぎって布を作ってくれ、それを巻いて止血した。

生まれて初めて、足の裏を深々と切ってしまった。車のところまで戻るには、一度海の中にはいり、別の陸に上がり、階段を 100くらい登らないといけない。ビッコをひきながらようやく車にたどり着いた。足の裏などさして役にも立つまい、と思っていたが、そうではなかった。波に押されて、体を支えようとした足の裏だから、普段もよく使うところを切ったわけだ。アクセルを踏むのも、ブレーキを踏むのも、ちょうど切ったあたりなのだ。歩いていても、そこは動かすまいと思うのに、そこは一番よく動く足の裏の部位であるらしい。足の裏を切るなら、動きに関係の少ないところを選ぶべきだ。ひとくちに足の裏と言っても、役割分担はさまざまで、ピッチャーのとこもあれば、捕手のとこもあり、そして外野選手のとこだってある。外野にすればよかったと思ったが、もう遅かった。

＊　＊　＊

自分の病院の救急室の処置台に横になった。年下の当直医が消毒してくれて、「少し痛いですよ。これが一番痛いです」と言って、局所麻酔をした。「おおおっ」と声を漏らしそうになった。激痛なのだ。ちょっとまてよ。今までにこんな痛み感じたことないぞ。生まれて初めて、こんなすごい痛みを、「おおおっ」。思わず、歯を咬みしめ、両手をにぎり、下腹にも力を入れた。

「ぼくもしゃんしゃん祭りのあとの打ち上げでこわれたビール瓶で足の指切りましてね、あれほんとに痛かったですよ」

ーいいんだよキミのことは、オレ、イマが痛いんだよ、ハヤク、縫っちゃってクレヨ。オーレ、オレオレ。

終わるとニコッとぼくはして「いや、どうも。大して痛まないよ」とかなんとか言って平静を装う。「あとで痛みますから」と当直医。

あれから1カ月以上が経つ。傷はようやく治ったが、歩行の度に、修復されたぶ厚い皮膚から、波と岩の感触が甦る。「傷つかずに人は変われない」という言葉をなぜか思い出した。

生まれて初めて、悲しいことも痛いことも辛いことも含めて、やっぱり求め続けたい。きっと何歳になっても、生まれて初めてのことで、面白いことはあると思う。どこかにきっと隠されている。